猫のラビリンス

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫のラビリンス

【Ｎコード】
Ｎ８４９９Ａ

【作者名】
茶山ぴよ

【あらすじ】
長崎に猫の写真を撮影しにいったまま連絡がなくなったカメラマンのケンジ。福岡に住むユウコは、彼を追って長崎へ旅立つが……。あなたの選択で４０通り以上のストーリーと４つの結末が待っている異色恋愛ホラー（でもホラーというほど怖くないかも）。

1◆START（前書き）

これは私が3年前に携帯ゲームの仕事として書いたホラーの原案です。

携帯ゲームなので、読者の選択肢によって、違う結末が用意されているところが少し変わってます。

ですが、小説ではありますし、携帯での掲載も終了していますことから、ここで原案を改稿したものを掲載いたします。

なお実際に上梓されたものは、少しこれよりも簡単になっていました。

1◆START

今朝もひとりきりでカフェオレを淹れた。

エスプレッソマシンを使った本格的なそれを味わいながら、私はため息をついた。

恋人のケンジと連絡がとれなくなって、もう1ヵ月になる。

心配なのに、顔を思い出すのに苦労するようになってしまった。

薄れゆく記憶に対抗するように、飾り棚にある彼の写真を見る。

そこには少し気の弱そうな彼の笑顔があった。

ケンジと一緒にこの福岡の街で暮らし始めて2年になる。

お人よしの彼は、いつもお金がなかった。

カメラマンの彼は、腕は悪くないのに、頼まれた安い仕事をいつも断れないでいた。

人のよさが災いして、彼の予定はギャラの安い仕事でいっぱいだった。

そんな彼が

「俺、長崎で猫の写真集を撮ろうと思うんだ」

と宣言したのは3ヵ月前だ。

彼のギャラが予想より多かったときに奮発して2人で行った長崎に、私たちはすっかり魅了されていたのだ。

坂の上まで立て込んだ住宅、それらを結ぶような細い坂と階段。

それらを登りつめると、晴れていたのに少しけぶったような港が見おろせた。

踊り場や塀の上では猫がのんびりと日向ぼっこしていた。

子供のように猫を追っかける彼がいとおしかった。

猫に逃げられて『えへ』と笑う彼。そんな彼はちょっと泣きそうな顔に見えた。

それは私が大好きな彼の表情だった。

私は猫のかわりに、彼によりそった。

そして、港を見下ろす狭い階段の一角で長いキスをした……。

彼にしては珍しくやる気だったから、私は彼の長崎行きを快く許し

てしまった。

はじめは頻繁に電話やメールがあったけど、ここ1ヵ月ぷっつりと途絶えてしまった。

もっとも一緒に暮らす前にも、忙しくて1ヵ月ぐらい逢えないことはあったけれど。

ケータイに連絡しても『電波が届かないか電源を……』のアナウンスばかり。

さすがに最近は心配で朝目覚めるとまず考えるのは彼のことで、そんなことは彼と付き合い始めた頃以来だ。

「ケンジ……」

今朝も思わずつぶやいた。それに応えるように

ケータイが鳴った→2話へつづく

物音が→3話へつづく

2話

◆2話

電話は友達のトモミからだった。

「えー、1ヵ月も連絡がないとぉ。それっておかしくなーい？」

トモミは、人が傷つくことをズケズケと口にする。悪気はないのだろうが、今の私にはちょっとキツイ。

「でもあの人、熱中すると全部忘れるヒトやけん……」

それでも、習慣なのか、つい弁護してしまった。

「ふうん。もしかして、彼にお金とか貸しとうと？」

「そうね……ちょっとだけ……」

具体的に言いたくなかったけど、私は１００万以上のお金を彼のために使っていると思う。

それはカメラの機材代だったり、取材の経費を立て替えてそれっきりだったり、といったものだった。

そのときどきは、たいしたことはない、と思っていたが、

積み重なってみると、正社員とはいえ単なるＯＬの私には、かなりな金額になってしまっていた。

生活費はちゃんと折半してくれていたからそれほど不誠実だとは思わなかったけど、

これをトモミに話したら『ひどーい！』のひと言で片づけられるだろう。それが嫌だった。

「……ねえ、ウダウダ悩むより、長崎に探しにいかん？　だいたいの行き先はわかっとっちゃろ？」

そうだ。

ごく当たり前の方法なのに、どうして今まで気がつかなかったんだろう。

もしかして無意識に怖かったのかもしれない。

だからその考えを追い払っていたのかもしれない。

でも。

私は決意した。やっぱりケンジにあいたい。

その週末、私とトモミは特急列車に乗り込み、昼前に長崎へ到着した。

昼食は長崎名物の

チャンポンを食べることにした

→4話へ続く

トルコライス（※）を食べることにした

→5話へ続く

（※）トルコライス

長崎名物の皿メシ。ハンバーグまたはカツ、ピラフ、カレー　など店によるが3種類の洋食が1つの皿に乗っているのが特徴。なぜ「トルコ」なのかは不明。

3話

◆3話

音が聞こえた方に目をやると、ミーコが窓を叩いていた。

ミーコはウチに出入りしていた野良猫で、ケンジによくなついていた。

私は窓を開けてあげた。ミーコはぴょーん、と部屋に入ってきた。

人懐っこく足の周りに体を摺り寄せて1週したあと、気持ちよさそうに伸びをした。

「ミーコ……。今日もケンジは帰ってきてないんだよ」

私はミーコにミルクをあげながら頭を撫でた。

半野良のミーコの毛並みは撫でるとすべすべとしている。

粉の中に手をうめるようなそんな柔らかさに、私は少し癒された。

そのときだ。

急にミーコが『フーッ！』とうなって身を固くした。

「どうしたの、ミーコ」

私の声も聞こえないのか、ミーコは飾り棚のあたりを見据えて威嚇

するのをやめない。

尻尾と一緒に、滑らかだった毛が逆立っている。

次の瞬間、飾り棚の上から写真立てが落下したのだ。それはケンジが写っているものだ。

私は駆け寄って拾い上げた。

さして重いものでもないのに、取り上げた写真立てには見事にヒビが入っていた。

しかもケンジの顔の部分に。

額にヒビが入ったままの泣きそうなケンジの顔。

不吉な予感がした。

――まさか、まさかケンジに何かあったのでは！

一度、芽吹いた不安は、風呂場に生えたカビのように黒々と根深くて、消そうとしてもなかなか消えなかった。

ついに私は……長崎に行くことを決意した。

長崎へは

ひとりで行く
→２３話へ

友達を誘って２人で行く
→５話へ

4話

◆4話

長崎は路面電車の町だ。

海岸線近くまで山が迫った狭い町の中を路面電車が行き交うさまは、ちょっとポルトガルのリスボンを思わせる。

ケンジと一緒だったときは車だったけど彼は、路面電車が邪魔で、運転しにくいや、とこぼしていたものだ。

その路面電車に乗って私たちが行ったのは『S』という有名な老舗チャンポン店だ。

友人のトモミにとって長崎は初めてだったので、まずは有名なところにしたのだ。

トモミは小さな牡蠣がたくさん入った、白濁スープのチャンポンを珍しそうに食べた。

「ふう。美味しかった……。ね、このあたりで猫が出そうで写真映えするところってあると？」

さっそく行動に入るのが彼女のいいところだ。

「前に来たときは、グラバー園の裏あたりにいたけど……」

私たちはさっそくグラバー園の近く、つまり南山手のあたりに行っ

てみた。

このあたりは外国人居留地があったところで、古い洋館が建て込んでいる。

白く塗装された優雅な建物は異国に迷い込んだようだ。

また、洋館と洋館の間には狭い路地がある。

ここが外国ならありえない、狭い路地が長崎らしいところだ。

テラスのついた2階部分が坂道に接続されている洋館もある。

そんな光景にトモミは

「わー、すごーい、カッコいい」

とはしゃいだ。1年前、私がケンジと一緒に来たときがそうだったように。

そのとき、猫の鳴き声がした。

振り返ると、私たちの目の前を1匹の三毛猫が歩いている。

その猫を見た私は自分の目を疑った。

三毛猫の背中の模様の形が、彼の背中のアザにそっくりだったからだ。

特徴的な形。

「ミャウ」

猫は誘うようにこちらを振り返って歩き出した。

私はその猫を追った。

猫は、人間が追うのにちょうどいい速さで私の少し前を進む。

そしてたどりついたのは……。

すぐ近く→6話へ

少し遠い→7話へ

5話

◆5話

「お腹すいた～！」

長崎駅に降りたトモミは叫ぶように訴えた。

もう昼だから、彼女の訴えも至極もっとも、私たちは昼食を食べることにした。

私たちが向かったのは長崎一の繁華街である思案橋アーケードから、少しだけはずれたところにある『T』というレトロな喫茶店だ。

そこは、長崎名物の1つである、トルコライスで有名な店だ。

トルコライスというのは、バターピラフにスパゲッティ、カツにカレーソースを一緒に盛りあわせた、

いわばお子様ランチの大人版みたいな長崎名物の洋食だ。2人ともそれを注文する。

ボリュームがあるなとは思ったが、各メニューの味を混ぜ合わせた味は新鮮なような懐かしいような感じで全部たいらげてしまった。

「それだけ食べられれば大丈夫やね」

トモミは笑った。

「……で、このへんで猫が出そうで写真映えするところってあると？」

「そうねえ……。寺町とかR通りかなあ」

ということで、昼食後、私たちはアーケードの北に当たる寺町まで歩いてきた。

前に来たときにこのあたりで猫を撮影してたからだ。

賑やかなアーケードから5分ぐらいしか歩いていないのに、あたりは静かで文字通り古い寺が並ぶ通りになった。

洋館や中華街とは違った長崎ならではの和の風情を、ケンジが気に入っていたのだ。

通りと寺の角を境にして小さな上り坂がいくつか分岐している。

『R通り』と幕末の維新の有名人の名前がついた小さな坂を登ってみる。

坂は途中から延々と続く階段になっている。

坂の両隣は民家が連なっている。

単なるブロック塀なのに岩のように苔むしてゆかしい風情が漂っているのが、なんともいい。

日ごろの運動不足か、気温はそれほど暑くはないのに汗ばんでくる。

「ユウコ、ちょっとまってよ～」

私は少し急ぎすぎたようだ。

トモミの息があがっている。私も少し下を向いて息を整えた。

そのときだ。私の目に、彼がいつもつけていたミサンガが飛び込んできた。

私はとっさに顔をあげた。

それをつけていたのは

女性→１２話へ

猫→１３話へ

6話

◆6話

猫は私たちが追ってきているのを確認するかのように、時折立ち止まると振り返った。

石畳の坂を登り、車の通れない路地へ入りこみ……。

「ちょっと戻れなくなるんじゃないの」

後ろでトモミがささやく。

たしかに、込み入った道筋は、記憶できる範囲をとうにはずれている。

しかし。

何かを予感した私は構わず猫についていった。

いけばケンジにつながる何かがある……と信じて。

と、突然。

猫が鞠のように跳ねた。次の瞬間には、ぴゅん、と走り出し見失ってしまった。

ふいに狭かった路地から、視界が開けた。

目のまえにあったのは白い塗装が少しはげてはいるものの、立派な洋館だった。

珍しく青々とした芝生に、白いベンチが置かれた庭がある。

私は迷わず庭へ足を踏み入れた。他人の家だというモラルはすっかり抜け落ちてしまっていた。

すると、庭で一斉になにかが動いた。

それは猫だった。２０匹以上の猫の群れだった。

芝生やベンチの上、屋根の上で、思い思いの姿でくつろいで猫たちが、

見知らぬ私たちの侵入に一斉にこちらを向いたのだった。

「ひゃ〜、なんかコワイかも……」

トモミはあとずさりした。私は立ちすくんでしまった。

こちらを向いていた猫たちが反対方向を一斉に向いた。

「……どなた？」

奥から誰かが出てきた。

それは……。

老婦人→８話へ

若い女性→１１話へ

7話

◆7話

猫は私たちが追ってきているのを確認するかのように、時折立ち止まると振り返った。

石畳の坂を登り、車の通れない路地へ入りこみ……。

人通りの多い通りに出る。

そこでは、見失わないように、わざわざ歩をゆるめているようにさえ見えた。

こまめにこちらを確認している。

私は、この猫についていけば、絶対にケンジにつながる何かがある、と思っていた。

――ひょっとするとケンジ自身が待っているのかもしれない。

そんな明るい希望も芽生えてくる。

車道の信号さえ、信号待ちの人の群れに混じって、ちょこんと座り、きちんと信号が変わるのを待っている。

猫について車道を渡ると再び、坂と路地をくねくねと曲がりながらいく。

どんどん洋館街から離れていくようだ。

「ちょっとぉ、戻れなくなるんじゃないの」

後ろでトモミが不安げにささやく。

たしかに、込み入った道筋は、記憶できる範囲をとうにはずれている。

しかし。

予感が確信に変わりつつある私は構わず猫についていった。

と、突然。

猫が鞠のように跳ねた。次の瞬間には、ぴゅん、と走り出し見失ってしまった。

道案内が急にいなくなって、私はとまどった。

私は、少し汗ばんでいた。

どうやら洋館街からかなり遠いところまで来てしまったらしい。

そこへ現れたのは……。

古民家→9話へ

女性↓１２話へ

8話

◆8話

銀髪を結い上げた、ドレスの老婦人が奥から現れた。

腕にはさっきの、三毛猫を抱いている。

「そうですか……」

紅茶を入れながら老婦人は相槌を打った。茶器はウェッジウッドの年代ものだ。

私たちは猫の洋館で老婦人に強くすすめられてお茶をいただきながら、長崎に来たいきさつを話していた。

でも残念ながら、老婦人も彼の姿は見てないとのことだった。

「これは私が焼いたカステラよ。市販のと比べると一味足りないかもしれないけど。おあがり」

黄金色のそれは謙遜とは正反対に見事にふっくらと焼けていて旨そうだった。

トモミは歓声をあげてさっそくフォークでそれを切り始めた。

私も手をつけようとした、そのときだ。

飾り棚の上で見張っていたさっきの三毛猫が、急にテーブルの上に

飛び降りてきた。

そして素早く私の皿の上からカステラを奪って奥へ逃げた。

「これ！」

老婦人は猫を追って奥へ走った。

しかし私は少しほっとしていた。

もともと甘いものが苦手なうえに、ケンジのことが心配で食欲がない。カステラはとてもじゃないけど食べられなかったのだ。

「ほんとに……、みんな手癖が悪いんだから。」

老婦人が戻ってきた。

「それがね、キッチンにいったらカステラはみんなあのコたちに食べられちゃってたの。すぐ代わりのお菓子を焼くわね」

「いえ、あの…、今トモミに少し分けてもらっていただきました。とっても美味しかったです」

「そう、でも……」

そのとき、私のケータイが鳴り出した。私が心臓が停まるほど驚いたのは、ケータイが静寂を破ったからではない。

このメロディは彼からのメール！

「にげろ」

たったそれだけがメールの言葉だった。

心臓がばくんばくんと音をたてはじめた。

「あ、あの私たち、予約入れてることがあるので、失礼します」

「そう……。残念だわ」

私は逃げるように洋館を後にした。別段老婦人が追いかけてくる様子はなかった。

「ユウコ〜、待ってよ、どうしたの？」

トモミには何故か理由を話せなかった。

夜、私たちは思案橋近くのホテルに泊まっていた。

私はずっと眠れず、シーツの暗闇の中でさっきのメールを眺めていた。

「にげろ」あの時彼は近くにいたんだろうか。

にげろ、というのはあの老婦人からという意味だろうか……。そんなことを思いあぐねているうちに少しまどろんだらしい。

「ユウコ、ユウコ」

私はトモミに揺り起こされて目を覚ました。
時計を見ると夜中の3時をだいぶまわっている。
「何？」
私は体を起こさずトモミの顔を見た。
「行かなくちゃ」
「どこに」
その問いには答えず「いいから！」とトモミはすごい力で私の腕をつかんで引き起こした。
仕方なく着替えると、トモミはフロントに電話をかけてタクシーを頼んでいた。
「ちょっと、どこに行くのよ」
タクシーの中でもトモミは私の問いかけにはまるで答えず無言だった。
いつもの能天気で陽気なトモミではなく、何かにとりつかれたように目はうつろなくせにじっと運転手越しにタクシーの行く先一点を凝視している。
ようやくタクシーが到着したのは市電の終着駅だった。

小さな車庫に車両が2つ納まっている。

昼間は忙しく街をにぎわしている市電とは別の物体のように静かに沈黙していた。

トモミもそんな車両と同様呆けたように車両の軌道の延長上で立ち尽くした。

「どうしたのよ、さっきから、トモミ」

私がトモミに近寄ったとたん、市電がカッっと目を見開いたかのように見えた。

突然トモミの前にある電車のヘッドライトが光ったのだ。

トモミと私の身体はまぶしい光に照らされた。

そのとたん信じられないことが起こった。手をかけていたトモミの身体が振るえだした。

「トモミ?」

トモミの身体は見る間に小さく縮んだ。……そして、目の前には一匹の小さな白猫が現れたのだった。

夢のようだった。

「トモミ!?」

「お前はどうして変わらないんだえ?」

市電から降りてきたのは昼間の老婦人だった。白猫は老婦人が出てくると一目散にすりよった。

「ようし、いいコ、いいコだ。そうか、お前、カステラを食べなかったんだね。……私はね。猫以外には興味はないんだよ！」

→終章その１へ続く

9話

◆9話

気がつくと、あたりは古い民家が建ち並ぶ通りになっていた。

中華街と洋館のイメージが強い長崎だが、こういう通りもある……。

そしてそれはケンジの好きな長崎の一側面だった。

……猫はそのうちの一軒の前に立っている。

利休色になった格子戸に凝った地紋のガラスがはめ込んである。

そして、鈍い色でところどころ欠けた瓦には苔。

すべてがセピアになったような家の中で、屋根に生えた苔だけがそこだけみずみずしい色彩を放っていた。

屋根が少し低いのは、時代が古い家屋だ、とケンジに聞いたことがある。

「ね」

トモミが指を指した先の軒下には、大きな魚の形の板がぶらさがっている。

タイヤキをそのまま大きくしたようなそれも、塊のままのかつお節を思わせるような、年季の入った渋い色に変わってしまっている。

「これ何？面白ーい」

トモミはまじまじとそれを見つめた。

「それは魚板といって、昔お寺で合図に使われとったと」

私はかつてケンジに教わったとおりの説明を繰り返した。

泣きそうな笑顔なのに、男らしい、骨っぽい感じの低音。

そんな彼の声を思い出して、急激に逢いたくてたまらなくなった。

古い格子ごしのガラス窓は開いている。

私はそっと中をうかがった。

古い家とまるでセットのような線香の匂いが鼻をついた。

その家の中には

彼がいた

↓１０話へ続く

彼のカメラがあった↓

１１話へ続く

１０話

◆１０話

『ケンジ！』

私は、ケンジの姿を古民家の中に見つけるなり、叫び声をあげそうになったが、次の瞬間凍りついた。

奥の間から、エプロン姿の若い女が現れたからだ。

女は、楽しげにケンジになんやかやと話し掛けながら、仕事に出かけるらしい彼の着替えを箪笥から出している。

そして、着替えを手伝っている。

ケンジも今日の仕事について、女に打ち解けた感じで話している。

……どうみても仲むつまじい夫婦だった。

私の好きなケンジの声なのに、私に向けられていない。

何かで頭を殴られたようなショック。私の視界はぐらり、と歪んだ。

さすがのトモミも息を飲んで、私の様子を伺っているのがわかる。

私だって

「どういうこと！」

と叫びたい。

しかしそんな衝動を私はかろうじて押さえて、突っ立ったまま様子を伺っていた。

脇の下にじっとりと汗をかいている。

彼が仕事に出かけるのを見届けてから、玄関のブザーをおす。

『ブー』という音が鳴る旧式なものに呼ばれて出てきた女は、家に似合うような古風な日本美人だった。

色白の肌に、黒目がちの瞳。

地味な顔立ちだが、眺めているうちにその美しさに目が離せなくなる。そんな顔立ちだった……。

女に話を訊くと、もう結婚6年にもなるという事実が判明した。

――だまされてたんだ。

私は、女にもトモミにも取り繕うことさえ出来ず、ふらふらと通りへ出た。

頭は混乱していたがもやもやしたカオスのような思考の中から徐々に湧き出てきた感情がある。

それは

怒りだった
↓終章２へ続く

哀しみだった
↓終章３へ続く

11話

◆11話

私は夢中でその家のブザーを押した。中から出てきたのは浴衣姿の若い女性だった。

小柄でいまどき珍しい真っ黒な髪が腰までである。

血管が青く透けそうなほど色が白く、潤んだような瞳は黒い部分がほとんどだった。

浴衣はたぶん木綿の藍染、プリントではなくきちんと染めたものだろう。

紺と白のシンプルな古典柄は、彼女の肌のきめ細かさを強調する。

奥へ案内してくれる横顔が、また美しい。伏目がちで睫がうっとりするほど長いのだ。

私は同じ女性同士なのにドキドキと胸が高鳴るのを感じた。

トモミもだまりこんで見とれているようだ。

やっぱりケンジのカメラがそこにあった。

「まあ……。このカメラが。あなたの大事な方の」

彼女は、このカメラが寺に置き去りになっていたのを、雨に濡れた

らいけないと、持ってきたという。

「どうぞお持ちください」

といとも簡単に返してくれた。

ただ、私たちが帰ろうとすると、さっきの三毛猫が激しく鳴いたのが耳に残った。

ミギャー、ミギャー、と猫がこんなに激しく鳴くのを私は初めて聞いた。

帰り道。

「綺麗な人だったねえ。私こっそり写真とっちゃった」

トモミは得意げに写メールを取り出した。

「いつのまにとったと？」

「ふふふ。ほら！」

その画像には横顔の彼女が写っているはずだった。

しかし……私たち2人は凍りついた。女は浴衣だけ写っていて体がない！

私はハッとした。あの猫の背中の模様……。

私は、彼の裸の背中を思い出した。

平原のようになだらかな褐色の彼の背筋の中には、赤ん坊の手のひらほどのアザがあった。

その特徴のある形を彼は嫌がっていたけど、私は好きだった。

よく、ベッドの上でそれに口づけた。すると彼はくすぐったがって体をよじったものだ……。

その、アザの形によく似ている気がする。いや、そのものの形！

気がつくとトモミをそこに置き去りにして、私はその家に駆け戻っていた。

「ホホホ、やっぱり戻ってくると思ったわ」

女は妙に紅い口を薄く開けて笑った。その後ろにはケンジが……！

→終章４へ続く

12話

◆12話

ちょうどすれ違ったその女性を見て私が息を飲んだのは、その人がきれいだったから、ではない。

そのときは、あることに気をとられて、その顔まで見るゆとりはなかったのだ。

私の視線と意識は彼女の腕の一点に、集中していた。

女性の腕についているのは……私が彼にプレゼントしたミサンガとそっくりなものだった。

それは私が以前、スペインの田舎町を旅行したときに買ったものだった。

本当はケンジと一緒に行きたかったスペイン。

だけど、例のごとくお金のないケンジは、計画だけ立てておきながら、私を見送るしかなかった。

彼が勧めたスペインの田舎町は素晴らしかった。

どこまでも広がるなだらかな乾いた沃野に、突然現れる名もない小さな町。

レンガが埋め込まれた通りの両側に並ぶ白い壁の民家。

そこではタペストリーのようなカラフルな布がドアがわりをしていた。

人々は素朴で、マドリードのような大都会のように犯罪対策をする必要もなく、心からのんびりとできた。

私はせめて彼にたくさんのお土産を買った、ミサンガは、そのうちの１つだ。

「ええー、これつけんのー？」

照れて抗議する彼に

「かわいーじゃーん！おしゃれやーん！」

私は押し付けた。彼は結局、ぶーぶーいいながらも着けてくれた。

複雑な織り方は日本、しかも九州では絶対に目にするはずがなく、男性が着けてもお洒落なものだから。

「待って」

私は女性を呼び止めた。

そのとき初めて、その女性がとてもきれいな人だということに気付いた。

色白で、長いストレートの黒髪に、大きくないのに印象的な瞳を持っていた。

彼女は私が呼び止めたことに気がつくと

逃げた→１４話へ

立ち止まった→１５話へ

13話

◆13話

ミサンガはその三毛猫の首に巻きついていた。

猫は私を見て立ち止まった。

「おいで、おいで」

私はしゃがみこむと、猫に呼びかけた。猫は私に飛びついてきた。

「ヤダ、その猫、泥だらけじゃない」

トモミが顔をしかめた。

「見て、私が彼にあげたミサンガよ」

それは私が以前、スペインの田舎町を旅行したときに買ったものだった。

本当はケンジと一緒に行きたかったスペイン。

だけど、例のごとくお金のないケンジは、計画だけ立てておきながら、私を見送るしかなかった。

彼が勧めたスペインの田舎町は素晴らしかった。
どこまでも広がるなだらかな乾いた沃野に、突然現れる名もない小さな町。
レンガが埋め込まれた通りの両側に並ぶ白い壁の民家。
そこではタペストリーのようなカラフルな布がドアがわりをしていた。
人々は素朴で、マドリードのような大都会のように犯罪対策をする必要もなく、心からのんびりとできた。
私はせめて彼にたくさんのお土産を買った、ミサンガは、そのうちの1つだ。
「ええー、これつけんのー？」
照れて抗議する彼に
「かわいーじゃーん！おしゃれやーん！」
私は押し付けた。彼は結局、ぶーぶーいいながらも着けてくれた。
複雑な織り方は日本、しかも九州では絶対に目にするはずがなく、男性が着けてもお洒落なものだ。
たぶん彼は気に入ったんだと思う……。

「何でそんな猫が……」

トモミはいぶかしげな目を変えないが、私には猫がしきりに何かを訴えるように首をしゃくるように見えた。

「あっ！」

猫は私の腕からぴょーんとバネじかけのように飛び出た。

「ど、どこ行くの！待って！」

私たちは猫を追った。

行き先は

古い家→９話へ

見晴らしのいい丘→３４話へ

１４話

◆１４話

彼女は、呼び止めた私に気付くと、一瞬、目を見開いて私を凝視した。

しかし、私が何か声をあげようとしたその時、長い黒髪をさっと翻して駆け出した。

――やっぱりケンジのことを何か知っているんだ！

一目散に逃げ出した彼女を見て私は直感し、反射的に彼女を追った。

狭い階段を駆け上っていく黒髪を私は必死で追う。

トモミもわけがわからないままに、ついてきたが、ついに

「待ってえ、私もう動けないわ」

と、早々にへばってしまった。

しかし私は構わず、彼女を置き去りにして、無我夢中で女を追跡した。

ものすごいスピードだ。

色の白い、しとやかそうな女なのに、さすが地元の人だ、早い。

長崎の人は、この階段と坂のおかげで足が鍛えられていると聞いたことがある。

大学の同級生だったと思う。

『だから足の太いとがなおらんたいねー』

と長崎の同級生は笑った。

しかし目の前を駆けていく女のふくらはぎは白くて華奢だ。

私の足などよりよっぽど弱そうなのに、いっこうにスピードが落ちない。

むしろ私のほうこそ、足がもつれそうになりながらも必死でついて行った。

足は痛く、体中がきしみ、心臓が悲鳴をあげる。熱くなった血液は脳をどくんどくんと攻撃する。

だけど。

――彼女はいったい、ケンジの何者!?

それを突き止めない限り、私は彼女の追跡をやめるわけにいかない。

苔むした塀が続く路地へ入り、今度は階段を下る。

私はとうとう彼女を

見失ってしまった
↓１６話へ

追い詰めた↓１７話へ

15話

◆15話

呼び止めた私に気付いた彼女は

「何かしら？」

と悪びれもせず、立ち止まった。

私のほうを見た、その顔を見てあらためてハッとする。

それほど綺麗な女だった。

長い黒い髪に磁器のように白くなめらかな肌、小さなうりざね顔に黒目がちの瞳。

古風な顔立ちの、和服が似合いそうな美人だった。

でも、正直言って、ミサンガはあまり似合うとは思えないのは私の僻みだけではないだろう。

だけど……さっきから心臓が暴れ出している。

脇にはじっとりと汗。これは坂道を歩き続けたからだけではない。

坂道が……路地が……ゆがんでいく。私は貧血のように体中が急速に冷たくなっていくのを感じていた。

この女は、ケンジの何？

ケンジの何かを知っている？

期待と恐怖が相反して私の中に渦巻いた。

呼び止めたくせに、何も言わないで沈黙している私のほうを、女は次第にけげんな顔で見始めた。

怪しまれてはいけない。

そう思うけど、なかなか声がでない。言葉が……思いつかない。

「あの、その腕につけているミサンガなんですけど……」

悩んだ挙句、私は、ようやく無難な言葉を選ぶことができた。

「ああ、これ」

女はそれがついた腕を自分の顔の前に上げた。

その腕も信じられないくらい細い。全体的に女らしい骨格なのだろう。

その目で、彼女がそれをとても気に入っているということがわかった。

女は、そのミサンガについて

「拾ったのよ」と言った
→１９話へ

「プレゼントよ」
と言った→２０話へ

16話

◆16話

さすがに日頃の積み重ねなのか、地元の人の足にはついに勝てなかった。

全力で追ったにもかかわらず、私は彼女を完全に見失ってしまった。

全力つまり文字通り、全ての体力を使い果たした私は、しばらく下をむいたまま顔をあげることができなかった。

息が完全にあがっている。荒い息は肺をきしませている。

額から流れた汗が、簡易アスファルトの階段に水玉の染みをつくる。

心臓が頭に移ってしまったように脳がドクンドクンと音をたてている。

……ようやく、風が吹き抜けていくのを感じられるようになって、私は顔をあげた。

いつのまにか、まったく知らない場所へ来てしまっていた。

観光客がいくような場所から大きく離れてしまったらしい。

ただ港を見下ろす高台にいる、それ以外、自分がどこにいるのか、わからない。

地図はトモミが持っているから私は場所を確認することもできない。

誰か通ったら道を聞こうとも思ったが、こういう時に限ってだれも通らない。

考えたあげく、あまり常識的な行動ではないが、一般の民家の扉をたたくしかないか、とそこまでに至った。

迷った挙句、緑がこんもりと肩の高さまでの塀をつくっている一つの家のブザーを押した。

ブロック塀などに比べると、門構えが優しげにみえたからだ。

誰も出ない。

しかし庭に面した窓にテレビの画像が反射してちらちらしているのが見える。

庭のほうにまわってみた私は驚いた。

そこにはケンジがいたからだ。

→２９話へ

17話

◆17話

私は必死だった。

その甲斐あって、女性をとうとう追い詰めた。

追い詰めてみると、意外に小柄な女性だった。色白に長い黒髪がひときわ目立つ。

私は逃げないように、彼女の腕をつかんだ。

しばらくお互い息が切れて言葉が出てこない。

だけど、はやる私は息を切らしながら彼女に訊いた。

「……私を……、ケンジを……知っているんですか？」

すると、女は私の手を振り払うように向き直り、黒目がちのひとみで私をキッとにらんだ。

「ケンジ、もう福岡には戻らないって！それに私……！」

叫ぶようなその先の言葉に、私は一瞬耳を疑った。もう一度訊きなおす。

「何度でも言うわ！　私のお腹には、ケンジの子供がいるんだから！」

彼女は強い口調で、確かに口にした。
私は地面が揺れるのを感じた。
……ケンジの……子供？
空と、港が逆転する。すべての音が消えた。

風が木々をゆらす、ざざっという音がして私は我に返った。
気がつくと私はしゃがみこんでいた。
「そう……。そんな身体で……。こんなに走って……。走らせて……ごめんなさいね」
私は地面を這うアリに話し掛けるように言った。
私のそんなようすに同情したのか、意外にも女は
「……ケンジもあなたにちゃんと話すべきだったのよね」
などと言った。さっきの強い口調とは違う、少し優しい口調だ。
私はうなづくと、立ち上がった。
「私、彼から何も知らされていないんです。せめて彼に会わせても

らえないでしょうか」

女は、本当に可哀想に、という目で私を一瞥すると、寛大にも彼に電話を掛けてくれた。

そんな同情的な態度をされている時点で私は負けた女なのだ。

彼との将来などもうみじんもないに違いないのだ。でも……ひとめ逢いたい。

彼は私と

逢ってくれない

→18話へ

逢うと約束→終章3へ

18話

◆18話

女は私から離れたところでしばらく彼と話しているようだった。

きれぎれに聞こえてくる会話は、とても親しげ……というよりもはや家族のようだった。

信じたくないけれど、彼女とケンジの関係は、堅固なものなのだ、と私は再確認せざるを得なかった。

私は、立っている力もなく、階段に腰掛けて港をぼんやりと見る。

それは少し、かすんでみえた。

あの港が見える階段の踊り場でケンジと長いキスをした日もこんなふうに少しかすんでいた。

思い出は鮮やかなのに、あれは幻だったのだろうか……。

戻ってきた彼女は、憐れむように私を見ながら言った。

「やっぱり会えないって」

彼女は

「私もちゃんと話したほうがいいと思うんだけど……彼、そういうところがだらしないのよね」

と、申し訳なさそうに続けた。

私は黙って立ち上がった。

目の前の視界が、砂嵐に包まれて、私は全身が冷たくなっていくのを感じた。

くらくらと頭が揺れる。ひどい貧血だった。

「大丈夫、あなた」

そんなに暑いわけじゃないのに冷や汗がどっと噴き出した。

彼女は私の汗をスワトウのハンカチでふき取ってくれた。

恋敵をもこうやって思いやることができる優しいひとなのだ……。

その細い腕に鮮やかな飾り。

私がケンジにあげたミサンガだ。

白い細い腕にあざやかなそれを見て私の中に憎悪が沸き起こった。

→終章２へ

19話

◆19話

女は、腕につけたミサンガについて

「拾ったのよ。あんまり綺麗だったから、もらっちゃったけど。」

と説明した。

まったく悪びれない口調はウソをついているとも思えなかった。

次のセリフを頭の中で探す私よりも前に、女は

「いったい、どうしたんですか？」

と訊いてきた。

古風な日本美人に見えたが、話し出してみれば、今時の普通の美人だった。

ミサンガにあわせた色にネイルアートされている爪、それに彩られた指で黒髪をさらりとかきあげる仕草が、洗練されている。

つややかな唇は光沢のある口紅の上に、グロスを丹念に塗ったのだろう。

ナチュラルな色ながら色っぽい。

親身な感じの表情に、初めて会う人にもかかわらず、私は今までの事情を話した。

恋人のケンジが猫の写真を撮影に3ヶ月前に長崎入りしたこと。

そして1ヶ月前から連絡がとれなくなってしまったこと。

私は彼を探すために長崎にやってきたこと。

そして、彼女がしているミサンガは、私がスペインで買ってきた、とても珍しいものだということ。

彼女は、それを興味深そうに、一言一言に頷きながら聞いていた。

私は、最後に訊いた。

「あの……それで、それを、どこで拾ったか教えてもらえますか？」

「もちろん。いいわよ」

女は笑顔で頷くと、快くその場所に案内してくれた。

その場所は

とある洋館
↓21話

見晴らしのいい展望台
↓22話

１９話（後書き）

６００文字ルールに辟易しながら書き足しています（汗
あまり書き足すと、破綻してしまうかもしれないし……。

あと、原案の話番号に欠番があったりしたので、それをずらす作業でわりとこんがらがって、思ったより苦労しています。

すぐに全話投稿してしまうつもりだったのですが、もう少しお待ちくださいませ。

２０話

◆２０話

「今つきあっている彼からもらったの」

彼女は嬉しそうに目を細めて言った。

……うそ。

頭の中で、嫌な予感が、線としてつながりそうな恐怖に私は震えそうになる。

私がケンジにあげたスペイン土産。日本には、同じものはたぶん売っていない。

それと同じものを彼氏にプレゼントされたという女。

怖い。

……だけど、もっと追求せざるを得ないでいる。

決定的なことを聞くまで私は止まらない。これは怖いもの見たさ、のようなものなのだろうか……。

「彼ってカメラマンでしょ……？」

訊きながら、私はそれでも一縷の望みにかけていた。違う、と言ってほしい。お願い。

「あら、なんで分かるの？」

私は頭で何かを殴られたようなショックをかろうじて表に出さずにすんだ。

トモミがハラハラしたようすでこちらを伺っているのがわかる。

だけど、人は案外強いものだ……私はショックをおくびにも出さず『ケンジの福岡の単なる知り合い』を演じて、彼女から彼の様子を探っている。

女は一見、古風な日本美人に見えたが、話し出してみれば、今時の普通の美人だった。

ミサンガにあわせた色にネイルアートされている爪、それに彩られた指で黒髪をさらりとかきあげる仕草が、洗練されている。

つややかな唇は光沢のある口紅の上に、グロスを丹念に塗ったのだろう。

ナチュラルな色ながら色っぽい。

女の話によると、どうやら、彼は私のことなどすっかり忘れてしまって、この綺麗な女と暮らしているらしい。

哀しみを通り越して、私の中に、真夏の積乱雲のように強く急激に湧きあがってくる感情があった。

こめかみが痛くなるような怒り。

↓終章2へ続く

21話

◆21話

ミサンガを拾った場所は、ここから少し離れているようだ。

「歩くとちょっとここからは遠いわよ」

とはっきりとした口調で女は言った。私は歩いてもかまわなかった。

しかし歩くよりはタクシーを使ったほうがラクだということで、その階段を降りきると大通りに出て私たちはタクシーを拾った。

女が案内してくれたのは、古い洋館だった。

白い塗装が少しはげてはいるものの、優雅な手すりを伴ったテラスを持つ立派なものだった。

「あそこに落ちていたの」

とそのテラスを指差して女は言った。

女にお礼をいい、帰りのタクシー代を多めに渡して帰した。

その洋館には、青々とした芝生に、白いベンチが置かれた庭があった。

私は迷わずその庭へ足を踏み入れた。

他人の家だというモラルはすっかり抜け落ちてしまっていた。
すると、庭で一斉になにかが動いた。
それは猫だった。２０匹以上の猫の群れだった。
芝生やベンチの上、屋根やテラスで、思い思いの姿でくつろいで猫たちが、
見知らぬ私たちの侵入に一斉にこちらを向いたのだった。
「ひゃ～、なんかコワイかも……」
トモミがあとずさりした。
１匹の三毛猫が、走りよってきて、私を見ると激しく鳴いた。
歓迎しているというより追い返すような激しい鳴きかただった。
こちらを向いていた猫たちが反対方向を一斉に向いた。
「……どなた？」
奥から出てきたのは
老婦人→８話へ

若い女性→１１話へ

22話

◆22話

女はさらに階段を登っていった。

たどりついたそこは……いつかケンジと2人で来たK展望台だった。

あの時と同じように山の斜面を覆い尽くすように立ち並ぶ家を見渡した向こうに長崎港の眺望が開けていた。

「ここに落ちていたの。あまりに珍しくて綺麗なものだったから、ブレスレットに使っていたの。

そんなに大切なものだとは知らずに……本当にごめんなさいね」

女は申し訳なさそうにミサンガを私の手の中に返してくれた。

それは大事に使っていたようで、彼が付けていた時とあまり変わらなかった。

それを握り締めると、彼にそれを渡した日のことが蘇ってきた……

それを呼び水にして、

彼の思い出が波のように私の脳裏に打ち寄せて、それはいつしか、私が大好きな彼の笑顔に塗りつぶされた。

泣きそうにも見える、優しい笑顔。大好きな笑顔。

そして、その顔に似合わない温かくて低い、男っぽい声。

2年も一緒だったのに……。

不意に涙がこぼれ落ちた。涙はアスファルトに黒い水玉をつくった。

女やトモミが心配そうにこっちをのぞきこんだが、私は涙を止めることができなかった。

どこへ……行ってしまったの。

長崎には1泊した。

ミサンガを拾った彼女はとてもいい人で、車を出して夜景で有名な稲佐山に案内してくれたり、

地元の人しか知らない美味しい中華料理の店を紹介してくれたり、

一生懸命、傷心の私を慰めようとしてくれていた。

しかし、神戸、函館と並ぶとされる長崎の夜景を見ても、私の心は癒されなかった。

ただ、付き合わせたトモミが喜んでくれたのがよかった、と思った。

でも、妙に赤い夕映えの中に、山々を覆うように散りばめられた煌きを見ながら、

『このどこかにケンジはいる』

と私は何故か確信していた。

ホテルのベッドで私はまんじりともしなかった。

翌日、私はトモミに、もう少し長崎にいて彼を探す、と宣言した。

→２３話へ続く

23話

◆23話

私は、彼を探して長崎の町をさまよった。

探すあては何もない。

考えてみたら私は、彼に宿泊先も聞いてなかったのだ。

もっとも、彼のこなす安い仕事は、安宿代ですらケチらないといけないような仕事も多かった。

彼はそのたびにボロくなったマイカーで寝泊りしていたのだ。

自発的な作品になる今回も、そんなに長期になるとは思わなかったから、いつものように車で寝泊りパターンなのだろうな、と私は思い込んでいた。

それで、宿泊先を聞かなかったのだ。

そんな私の道しるべはただ1つ。

彼が『猫の写真集』といっていたことだけだった。

だから私は、猫がいるところを人に聞いては歩いた。

もしも猫が口を聞けたなら猫に聞くのが一番なのだろうが……。

必死の形相の私に反して、猫は目の前を悠然と横切ったり、門柱の上で丸くなっていたりと、のびのびと活動していた。

彼だったらシャッターチャンスの宝庫だっただろう。

……ダメだ。

もう夕方だが、彼の手がかりは何もつかめなかった。

一日中歩き回った足は、すっかり棒になっていて、もう感覚がない。

私は狭い石造りの階段の途中に座り込んだ。

山肌の中腹まで住宅が建て込んでいる一角だ。

目をあげると夕暮れの長崎港がよく見える。

下のほうから人があがってくるのが見えた。

上がってきたのは

郵便配達員→２４話へ

年配の女性→３１話へ

２４話

◆２４話

郵便配達員が登ってきている。

『ここ長崎では車が通れない階段や坂道が多いから、郵便配達員は大変なんだよ。自分の足で配達しないといけないからね』

彼が言ってたのを思い出した。

私はダメもとで、あがってきた郵便配達員に彼の写真を見せて尋ねた。

人のよさそうな、おじさんの配達員は、案の定知らないと言う。しかし

「その人はしらんけど、猫がいっぱいおるところは知っとうよ」

と親しげに教えてくれた。

メモを手渡すと、地図まで書いてくれた。

私は彼に教えてもらったとおり、行ってみたが、何せ入りくんだ路地だらけだ。

すっかり迷ってしまった。

するとそこへ１匹の黒い猫が通りかかった。

「ついていったら、猫だまりがあるかもしれない。そこに彼がいるかも」

一縷の望みに、私は疲れた足を引きずるようにして黒猫についていった。

しかし、途中で黒猫はひょいっと塀に飛びうつり、行ってしまった。

3次元で活動できるという点で、猫はヒトより優れているのだ。

行き止まりに私は取り残されてしまった。

がっかりして引き返そうとした先に、若い男3人がいつのまにか階段に腰をおろしている。

だらしない腰パンに、腕にはタトゥー。

ワルだというのは外見だけで容易に判断できた。

ヤバイ目で私のことを見ている。

急いで通り過ぎようとすると、

「待てよ」

と3人はいきなり立ち上がった。

私は、迷うことなく身を翻すと走った。

逃げる私を男達は追ってきた。

どっちに行けばいいのかわからないのでやみくもに走った先には墓地があった。

大木の下にあった大きめの墓石の陰で私は必死でケータイの番号を押した。

番号は

１１０番→２５話へ

彼の番号→２６話へ

25話

◆25話

110番には、すぐにつながった。

私は彼らに見つからないように、小声かつ早口で状況を説明した。

警察は私の状況を察して、

「すぐに現場に急行します。そこはどこですか？」

と訊いてきた。しかし、地元人ではない私は、うまく場所を説明できない。

いいよどんでいるうちに、

「いたぞ！」

との声が上から響いた。

さっきの男のうちの一人が、私を見つけてしまったようだ。

3人の男は、私を囲むと、じりじりと近寄ってきた。

「いや……」

私はあとじさりした。

かかとがなにかにぶつかる。大きな木の根っこだと確認するまでもなく、背中がその幹にぶつかった。

もう、あとがない。

「助けはこないぜ」

腕に刺青をした男の一人が楽しそうに言った。

「抵抗するより、楽しんだほうがお互いラクだぜ」

長髪をたらした、もう一人がガムを噛みながら、私の腕をつかむ。

「イヤー！」

腕に触れられて私は反射的に大声を出した。

その時だ。木の上から何かが飛んできて、男が

「ギャッ！」

と叫んで私から手を離した。

私に触れていた男の横面に赤い線が3本。そこから、血がたらり、と流れた。

見ると、背中に茶色の模様がある三毛猫が、足元でグルグルと唸っている。

気がつくとあたり一面猫に囲まれていた。

「なんだ、コレ……。不気味すぎ」

男達は猫の大群に恐れをなしたのか、私のことを置いて走って逃げてしまった。

放心した私に、猫の大群の向こうから人が歩いてくるのが見えた。

その人は

老婦人→２８話

ケンジ→２７話

26話

◆26話

墓石の陰に隠れた私が無我夢中で押したのは、彼の番号だ。

こんな緊急時に何で押したのか、自分でもわからない。

しかし、私の携帯の中でコール音が始まったと同時に、思いがけず近くで携帯の呼び出し音がひびいた。

それは、まさに私がかけたのとピッタリのタイミングだった。

呼び出し音は切り立った墓地の地面と同じ高さに、軒を連ねる民家からのようである。

山の急斜面に家が立ち並ぶ長崎では、隣の家の地面が自分の家の屋根の高さ、というようなことはよくある。

私は自分の携帯を切ることも忘れて、呼び出し音がする民家の軒を覗き込んだ。

しかし、ちょうど運悪く、その呼び出し音のせいか、男達もこちらを振り向いていたようだ。

「いたぞ！」

見つかってしまった！

こっちに向かってくる男たちを見て、私はあせった。

しかし、逃げ場はない。

目の前は低いブロック塀だが、それを越えたところにはちょうど、携帯が鳴っているらしい民家の屋根が見えている。

墓場のブロック塀と民家の庭への落差は、2階建てぐらいの高さがあり私は躊躇した。

しかし、男たちはあと数歩に迫っていた。

私はいちかばちか、ブロック塀に足をかけると、その家の庭をめがけて墓地から飛び降りた。

着地したはずみに転んだけど、擦り傷程度で済んだ。

まだ携帯の呼び出し音は鳴り続けている。

「助けて！」

私はその家のサッシ窓に張り付くようにして叫んだ。

しかし、次の瞬間、私は叫び声が凍りついたように止まってしまった。

サッシの中には、ケンジがいたのだ。

→29話へ

27話

◆27話

猫の大群が道をあけるようにして、ひとりの男が歩いてきた。

それは……ケンジだった。逢いたかったケンジが歩いてくる。

なのに、言葉が出ない。私はやっと、彼の名前を舌に乗せることができた。

「……ケンジ」

胸がいっぱいで、ただケンジの顔を見つめるしかできない私を、ケンジは無言で助け起こした。

そして、そのまま手をひいた。

ケンジの手ってこんなに冷たかったっけ？

私の記憶だと、温かくて適度に湿り気があって……人肌で温まった布団のように離れがたい手だったと思うが……。

「ニャー！」

私を呼び止めるかのようにさっき、私を助けてくれた三毛猫が叫んだ。

「ちょ、ちょっと待って。ケンジ、あの猫は……」

「いいんだ」

ケンジはなんだか機械の様な話し方だった。

勝手に長崎にやってきた私を怒っているんだろうか？

それっきりだまって、冷たい手で私の手をとり、早足で歩いていく。

あの三毛猫は私たちのあとをずっとついてきた。

ケンジが私を連れてきたのは古い民家だった。

軒先に木でつくった大きなタイヤキのような魚が下がっている。

『それは魚板といって、昔お寺で合図に使われとったと』

私はかつてそれをケンジから聞いた。

和風の古い町家は、いかにもケンジが好みそうな家だった。

ケンジは無言で利休色になった古い格子をあけた。

「おかえりなさい。あら」

中から出てきたのは美しい浴衣姿の女性だった。私に気がついて軽く会釈をする。

小柄でいまどき珍しい真っ黒な髪が腰まである。

磁器のように滑らかな肌はまっ白で、潤んだような瞳は黒い部分がほとんどだった。

と、さっきの三毛猫は、格子戸から家の中へするり、と入り込んだ。

ここの飼い猫なのだろうか？

ケンジ、といえば、どういうわけか寡黙であまり言葉を発しなかった。

というより呆けたような表情でせっかく再会できたのに、心ここにあらず、といった風情だ。

彼女のことを私に紹介するわけでもなく、私のことを彼女に紹介するわけでもない。

ぼんやりと畳の上に座っている。

「あら、ちょっとお湯が沸いたようですわ」

お茶を淹れに女性が席をはずしたすきに、私は彼に擦り寄った。

「ねえ、……あのヒトは誰なの」

私の問いかけへの彼の答えは

無言→終章４へ

実は妻なんだ
↓３３話へ

28話

◆28話

大群の猫が両側に分かれはじめた。

真ん中にできた道の向こうから、和服の人が歩いてくるのが見えた。

銀髪を美しく結い上げた上品な老婦人だった。

私を見つけると早足で、近づいてきた。

早足なのに、着物の裾が乱れない。

「アナタ……、大丈夫？」

老婦人は、大木に寄りかかって呆然とする私に声をかけた。

髪こそ銀髪だが、しわがれることもなく、張りのある声だ。

「擦りむいているわ」

肘のあたりを墓石で擦ったのか、血がにじんでいた。

私は言われて初めて気付いた。逃げるのに夢中だったのだろう。

ようやくほっとした私は、今ごろ大きくため息をついた。

「……大丈夫です」

「そんな。若いお嬢さんが。消毒しないと跡になってしまうわ。すぐそこだから寄ってらして」

老婦人は自宅に私を誘った。しかし、たった今会ったばかりの人だ。私は遠慮した。傷も本当にたいしたことなかったし。

「いえ、本当に大丈夫なんです」

「でも、せっかくだから……ね？」

老婦人の誘いは、なぜか断れないような感じだった。目力、というのだろうか。

身なりからも悪そうな人じゃないし、せっかく親切なんだし……。

と私は彼女の好意を素直に受けることにした。

婦人に従って歩き始めた私に、

「ニャー！」

私を呼び止めるかのようにさっき、私を助けてくれた三毛猫が叫んだ。

婦人は、その猫をチラリと一瞥したが、追い払うでもなく、無視して

「さあ」

と私に寄り添った。

その三毛猫はずっとついてきた。

→31話へ

29話

◆29話

彼も私を見つけて驚いたようだ。サッシをあけて縁側に私を入れた。

「どうしたんだ！ユウコ！こんなところで」

「ケンジ！」

すべての隔てがなくなった私達は抱き合った。

久しぶりの……ケンジのぬくもり。広い肩。

しかしそれも一瞬で、ケンジは私から身体を離した。

「シ！隠れて！」

ケンジは押入れの襖を開けると、私にその中へ入れとうながした。

「どうしたの？」

「いろいろ事情があるんだ」

私が隠れた押入れの襖が閉まったのとほぼ同時に、誰かが部屋に入ってきた。

私は襖の隙間から漏れる、一筋の明かりに向かって耳を凝らした。

「どうしたの？サッシが開く音がしたけど」
若い綺麗な声の女性だ。
「ああ、蛾が一匹、部屋に入ったから追い出していたんだ」
ケンジが言い訳をしているのが聞こえる。
「そう」
女は疑わなかったようだ。
「ところで今日のお夕食は肉と魚とどっちがいい？」
「どっちでもいいよ……、うん、どっちかというと魚が……いいかな」
「わかったわ」
女性は出て行ってしまったらしい。
私は、押入れの暗闇の中で、どうしようもない不安に捕われていた。
どうやらこの家で、その綺麗な声の女性とケンジは暮らしているらしい。
すっかり日常的になった会話のようすだと、かなり長いのか。
目の前の暗闇と同様、心が真っ暗になっていくのと裏腹に襖がカラリと開いて明るくなった。

「今の、どういうこと？」

「シ！今は言えないんだ」

ケンジはあたりをうかがった。女が戻ってくる気配がないのを確かめると、

「実は……事情があってここに閉じ込められているんだ。信じてくれ」

私にしか聞こえないような小声で囁いた。

「でも……」

「夜なら出られる。今夜ここで待っていてくれ」

彼は私に紙切れを渡した。

私は彼を

信じる→終章３

信じない→３０話へ

３０話

◆３０話

『閉じ込められている』という彼の話は、いかにも作り話じみていて信じがたかったけれど、

彼に逢いたかった私は地図の場所にやってきてしまった。

そこは市電の終着駅だった。何げない小さな車庫に車両が２つ納まっている。

昼間は忙しく街をにぎわしている市電とは別の物体のように真夜中の今は静かに沈黙しているのが物珍しい。

約束の時間を過ぎたのに、彼はやってこない。

人通りもほとんどない終着駅を夜風が吹き抜けていく。

……やっぱり彼はここであの女の人と新しい生活を……。そうなんだ。

あの女性が現れた時点で諦めていたけど、私は哀しくて涙が出そうになった。

鼻の奥が涙でつーんとした時、１匹の猫が飛ぶようにこっちへやってきた。

私の足もとに必死ですりより、尋常じゃない鳴き方だった。

「どうしたの？」

私はその三毛猫を抱き上げた。首に何か、コヨリのようなものがついている。それはケンジからの手紙だった。

『愛するユウコへ。信じられないと思うが、この猫は俺だ。

俺は化け猫の呪いを掛けられて猫にされてしまった。

もうたぶん人間には戻れない。この秘密を知ったとわかれば君はきっと殺されてしまう。

だから、この紙は燃やして早く福岡へ帰れ。幸せになれ。ケンジ』

「何これ！こんなことでごまかそうってことなのね！ようするにこっちで新しい女を見つけたんでしょ！」

思わず私は手紙を破り捨てた。三毛猫は

哀しげに鳴き続けた

↓終章1

どこかに行ってしまった

↓終章2

31話

◆31話

出会った銀髪の老婦人に招かれて連れてこられたのは古い民家だった。

軒先に木でつくった魚が下がっている。

『それは魚板といって、昔お寺で合図に使われとったと』というのを、私はかつてそれをケンジから聞いたことがある。

古い格子をあけて通された居間には、丸いちゃぶ台とかりんとうのような色になった古い水屋がある。

猫が自由に数匹ウロウロしていたが不思議と獣の匂いのしない家だった。

「どうぞ」

老婦人は濃い茶と一緒に菓子皿を私の前に置いた。

「これは私が焼いたカステラよ。お店のと比べると一味足りないかもしれないけど。よかったらおあがり」

黄金色のそれは謙遜とは正反対に見事にふっくらと焼けていた。

私がそのふっくらした固まりにフォークを刺したその時だ。

台所のほうでガチャーン、と派手にものが壊れる音がした。

「まあ、何かしら」

老婦人が台所へはずしたすきに、飾り棚の上で見張っていた三毛猫が急にテーブルの上に飛び降りてきた。

それは、さっきから私のあとをついてきた三毛猫だ。

そして素早く私の皿の上からカステラを奪って再び高みに飛び上がった。

老婦人はそれからすぐに戻ってきた。

「ごめんなさいねえ、猫ちゃんの悪戯だったわ。……おかわりは？」

老婦人は、私の前にある空の皿を見て、おかわりを勧めた。

しかしカステラをとられた私は少しほっとしていた。

もともと甘いものが苦手なうえに、ひどく食欲がない。ちょっとカステラを食べる気分じゃなかったからだ。

「あ、結構です。とても美味しかったです。」

と、カステラをいただいたことにして取り繕った。

３２話へ

32話

◆32話

私は、気に入られてしまったのか、老婦人は泊まっていけと、熱心に勧めた。

「どうせ女性独り暮らしですもの。若い人ともっとお話したいわ」

老婦人が小奇麗で、洒落ていたこともあり、私はつい泊まることにしてしまった。

糊のきいた夜具は、よい匂いがして、私はあっという間に眠りについた。

……夢を見た。

『逃げろ、ユウコ、逃げろ。ここにいちゃいけない』

必死の形相のケンジだ。

私は跳ね起きた。障子ごしに差す月の光りが妙に明るい。

……と、障子に映った人影が動いた。

私は夢の続きを見ているのかと思った。

それはケンジだった。私はあわてて寝巻きのまま、格子戸を開けて外へ出た。

ケンジは走って逃げていく。

「待って！ケンジ待って！」

あと少し、というところでケンジを見失ってしまった。

市電が通る大通りまで出てきてしまった。

時計を見ると3時すぎていて、ほとんど車も通らない。

右手に市電の終着駅があった。何げない小さな車庫に車両が2つ納まっている。

昼間は忙しく街をにぎわしている市電とは別の物体のように静かに沈黙しているのが物珍しくて私は足を止めた。

とたん、市電がカッ、と目を見開いたかのように見えた。

電車のヘッドライトが光ったのだ。私の身体はまぶしい光に照らされた。

「お前はどうして猫にならないんだえ？」

市電から降りてきたのはあの老婦人だった。

「そうか、お前、カステラを食べなかったんだね。……私はね。猫以外には興味はないんだよ！」

↓終章1へ

33話

◆33話

「ねえ、……あのヒトは誰なの」

私の問いかけにもケンジはだまったままだ。

そのとき、女が茶を持って現れた。

「あなた、この方？　よく話してくれる、福岡での仕事で知り合ったお友達って」

女は、親しげにケンジに問い掛ける。

『あなた』だって。

私は、殴られたようなショックを受けた。

「あ、あの……」

私はショックのあまり起こっためまいに対抗するように口を開いた。

「あらやだ。私ったら」

女はハッとしたように片手を口にあてた。

しかし、その次の瞬間、私に親しげに微笑んだ。

「自己紹介もしないで、ごめんなさい。私、家内のミサコといいます」

『家内』

とうとう、決定句がもたらされた私は、口を半開きにしたまま、あいまいに微笑むしかなかった。

「この人、無口で人付き合いが悪いでしょ。あなたのようなお友達が出来るのは奇跡的だと私、思うのよ」

女は楽しげに笑いながら話した。

私は、女がそういうのが信じられなかった。

質の悪い冗談か、もしくはすべてを知っていてあてつけているのか……。

しかし、女はあくまでも無邪気で、私とケンジのことなど、まったく疑っていない。

ケンジは、だまって……むしろ泰然としているように見える……茶を啜っていた。

女の話によると、ケンジと女はもう結婚6年にもなるという事実が判明した。

そして、女が話すケンジは、無口で偏屈で頑固者のようだ。

私が知っている、猫が大好きで泣きそうな笑顔が温かいケンジと別

人のようだ。

しかし、ここにいるケンジは、私のほうなど見ずに、

「タバコ買ってくる」と席を立った。

――だまされてたんだ。

私は、ふらふらと通りへ出た。

女とケンジが暮らす家をどうやって辞してきたのかも記憶がない。

アスファルトから、いっせいに蚊が飛び立つ……透明な蚊が……。

私は道の傍らにうずくまった。

頭は混乱していたがもやもやしたカオスのような思考の中から徐々に湧き出てきた感情がある。

それは

怒りだった

↓終章2へ続く

哀しみだった

↓終章3へ続く

34話

猫はさらに階段を登っていった。

たどりついたそこは……いつかケンジと2人で来たK展望台だった。

あの時と同じように山の斜面を覆い尽くすように立ち並ぶ家を見渡した向こうに長崎港の眺望が開けていた。

猫はそこにつくと、気持ちよさそうに伸びをした。

猫の首についていたミサンガは、ほとんど汚れておらず、彼が付けていた時とあまり変わらなかった。

それを見ているうちに、彼にそれを渡した日のことが蘇ってきた……それを呼び水にして、

彼の思い出が波のように私の脳裏に打ち寄せて、それはいつしか、私が大好きな彼の笑顔に塗りつぶされた。

泣きそうにも見える、優しい笑顔。大好きな笑顔。

そして、その顔に似合わない温かくて低い、男っぽい声。

2年も一緒だったのに……。

不意に涙がこぼれ落ちた。涙はアスファルトに黒い水玉をつくった。

トモミが心配そうにこっちをのぞきこんだが、私は涙を止めること

ができなかった。

どこへ……行ってしまったの。

長崎には1泊した。

長崎につきあってくれたトモミのために、中華街に行ったり、夜景で有名な稲佐山に行ったりなど一通り観光を楽しんだ。

トモミは一生懸命、傷心の私を慰めようとしてくれていた。

しかし、神戸、函館と並ぶとされる長崎の夜景を見ても、私の心は癒されなかった。

ただ、付き合わせたトモミが喜んでくれたのがよかった、と思った。

でも、妙に赤い夕映えの中に、山々を覆うように散りばめられた煌きを見ながら、

『このどこかにケンジはいる』

と私は何故か確信していた。

ホテルのベッドで私はまんじりともしなかった。

翌日、私はトモミに、もう少し長崎にいて彼を探す、と宣言した。

↓23話へ続く

終章1

◆終章1

プアン。

と、警笛がなり、止まっていた電車がごとり、と動き出した。

私は目を疑った。

運転席に……誰も乗っていない！

電車は急速にスピードをあげて私の方に近づいてくる。

『軌道の横に逃げればいい』とわかっているのに、身体が動かない！

電車は私を跳ね飛ばそうとした。

轢かれる！

そのとき。私は何かに力いっぱい突き飛ばされた。

間一髪、軌道の脇に倒れこんだ私が振り返ると、月の空に一匹の猫がロングシュートのような長い弧を描いて高く飛ばされるのが見えた。

猫の体は、次の瞬間、地面に叩きつけられた。
電車は猫をはねると消えてしまった。
私は恐る恐る、終着駅を振り返った。
信じられないことだが……そこには何事もなかったように、電車が2台、動いた形跡もなく静かに沈黙していた。
私はぼろきれのように横たわる猫に駆け寄った。
昼間の三毛猫だった。
弱弱しく「ニャア……」と一声鳴いてことときれた。
その次の瞬間、信じられないことが起こった。
猫の死体がむくむくとふくらんでいく。
死体の膨張が終わって私は、がっくりと膝をついた。
それは、ケンジだったのだ。ケンジがそこに横たわっていた。
「ケンジ、ケンジ……、ケンジってば！」
私は、呼びかけながら、血がこびりついたケンジの頬を手で包んだ。
まだ温かい。だけど急速に冷えていくのがわかった。

しかし、ケンジに戻ったその身体をいくら揺さぶっても、もはや動くことはなかった……。

終章2

◆終章2

重いカメラバッグを抱え、首からもカメラを提げて彼は約束の5分前にやってきた。

「〇〇です。今日はよろしくお願いします」

苗字を名乗った彼は、振り返った私を見て顔が見事に引きつっていた。

「騙されたわね、ケンジ」

「ユウコ」

私は、出版社勤めの友人に頼んで、架空の長崎の風景撮影をケンジに発注したのだ。

待ち合わせ場所に指定したのは、R通りより一本入った裏道の階段をのぼりつめたてっぺんだ。

「今日は、私のお金を返してもらおうと思ったの」

「……か、金なんか借りてないぜ。お前がくれたんだろ！」

彼は居直った。この男は……こんな卑屈な顔をするときも泣きそうな顔なのだ。

それを見て、私は決心を固めた。

「……まさか、本当にそういうとは思わなかった」

すかさず、私は勢いをつけて、彼を階段にむけて突き飛ばした。

重いバッグをもっている彼は、簡単にバランスをくずして、カメラごと長い階段を転げ落ちていった。

私は彼が転げ落ちたほうへゆっくりと降りた。彼は踊り場に横たわり、うめいていた。

足が不自然な方向に曲がっているが、この様子だと死にそうではない。

カメラバッグの中身は無事なようだが、首から提げたカメラは、レンズが外れて、本体もへこんで凸凹になっている。

こちらは、もうだめだろう。それは１００万もするカメラだ。

「あら、ゴメンネ、つまずいちゃったわ。カメラも台無しね。でも私がいなかったら手に入らなかったものは壊れても仕方ないわよね。……じゃ、さよなら」

私は彼を置き去りにして軽やかに階段を下りた。青い空の下の長崎港に今船が入るのが見えた。

終章3

◆終章３

彼が逢瀬の場所に指定したのは港のはずれの倉庫、しかも夜更けだった。

時計が２３時を示したとき彼の車がやってくるのが見えた。

「ケンジ」

私は、懐かしくて彼が車を降りるのも待ちきれず、ドアへと近寄った。

けれども、車を降りた彼は、まるで別人のようだった。

３ヵ月前の少したよりないけど優しい感じじゃなくて、陰気な感じだった。

沈黙のまま私の前を通り過ぎて、海の近くで止まった。

「ねえ、いったいどうしちゃったの？」

彼は、私のほうを見ようともせずに、煙草に火をつけた。

港の三方を山が囲んでいる。その中腹まで灯りが散りばめられている。

紫煙をくゆらせた彼が、その中にシルエットで浮かび上がる。

ケンジはあいかわらず何も言わない。

「ねえ、ねえったら」

私は、ケンジに甘えるように、すがった。

ケンジは、ようやく私に向き直ると

「俺のことがまだ好きなのか」

ロクに吸ってない煙草を海に放り投げながら訊いた。

「……好き」

もう、あきらめているのに。思わず言葉がこぼれ出たのと同時に涙がこぼれてしまった。

私の涙を見てなのか、彼は困ったような顔をしてこちらへ歩いてきた。

そして何も言わず私を抱きしめた。

彼が手を首にまわしたときも、私は口づけされるんだ、と目を閉じて、その久しぶりの柔らかい感触を待った……。

「うっ！」

私が目を見開いた時は手遅れだった。

最期に私が好きだった優しい笑顔を見せてほしい、必死の形相の彼に思ったのはそんなことだった。

終章４

◆終章４

「ケンジ！」

私は彼の胸にむしゃぶりついた。

「今までどうしてたのよ！心配したんだから」

彼は何も言わずさもいとしげに私を抱き寄せた。

さっきの三毛猫は高い棚の上で何故か怒ってグルグルと唸っている。

ケンジが私に口づけようとしたその時だ。

「ギャーオ！」

猫は棚の上から飛び降り、私達の顔の間に割って入ると、彼の頬にツメを立てた。

「何するのよ！」

猫はなおも彼の胸のあたりにツメを立てて貼り付いている。

私は猫を引き剥がし、床へ落とした。

床へ落ちた猫はなおも私のスネを引っ掻く。

ケンジはひるまず私を再び抱きしめ、唇を押し当てた……。

どさり、と『私』はその場に倒れこんだ。

猫が悔しそうに鳴き続けている。ざらざらとした猫の舌を額に感じて私の意識は戻った。

なんだか、とても小さくなったような気がする。

目の前に倒れている女を見て……私は驚いた。それは私だったからだ。

私は動転して、自分の手を見ようとした。

それは、白い毛に覆われていた。そしてツメがイヤに尖っている……。

私の『体』は倒れこんだままだった。

別のモノに変身した私は、私の『体』を見つめておろおろするだけだ。

次に浴衣の女が、霧のように薄れ、その煙は倒れた私の口から入り込んだ。

死体のようにぐったりとしていた『私』の身体は、目をカッと見開

くと、むくりと起き上がった。

「ふう、3百年ぶりの生身だわ。おお痛。スネにこんなに傷が」

『私』になった女は、３００年前の辛かった境遇を話し出した。

好きな相手と引き裂かれた女は、唐人相手の遊女として売り飛ばされてしまい、挙句心中したのだという。

「さあ、長居は無用よ。行きましょう源三郎」

とケンジのことを源三郎、と呼んで2人で出て行ってしまった。

私?長崎の坂道でたむろしている猫の1匹です。あの三毛猫はケンジだったんです。

だから、皆さんに助けてほしいの。身代わりになってほしいの。いつまでも待っているから……。

終章４（後書き）

ゲーム感覚の小説はいかがだったでしょうか？

１話をいろいろなところで使いまわしているので、ぎこちない部分もあると思います。

今回は、やっぱり６００Ｗまで書き足すのが一番大変でした（笑）

あまり怖くない、拙い話でしたが、感想や評価をいただけますと幸いです。

近日中に、この形式の、次はもっとグロイ話をアップしようと思います（やっぱり携帯ゲームの原案ですが）。

最後に、皆様ご愛読、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8499a/

猫のラビリンス

2010年10月13日16時30分発行